神道フォーラム

ISSA : International Shinto Studies Association

Vol.55
神道国際学会会報
平成29年8月1日号

特定非営利活動法人 神道国際学会　〒158-0096 東京都世田谷区玉川台2-1-15 ベスト用賀2F　電話：03-6805-7729　http://www.shinto.org

平成二十九年度社員総会・第十九回国際神道セミナー開催

平成二十九年三月二日、東京都中央区のセミナールームにおいて神道国際学会「平成二十九年度社員総会」が開催された。社員総会は、前年度の活動について社員（会員）の皆様に報告し、次年度の活動計画について話し合う、特定非営利活動法人にとって非常に重要な会議である。今年は本人出席・委任状出席を含め二一七名の社員の出席のもと、活動計画や新役員加入など全ての議題について承認された。総会後には「日本人の死後の世界（異界）観」と題して第十九回国際神道セミナーを開催し、アンダソヴァ・マラル氏（日本学術振興会外国人特別研究員）、今井秀和氏（国際日本文化研究センター機関研究員）、鈴木岩弓理事（東北大学大学院教授）による基調講演や、パネルディスカッションによって日本人にとっての死後の世界について理解を深めることができた。

神道国際学会「平成二十九年度社員総会」では、塩谷崇之理事を議長に選出し、まず、昨年の活動内容および決算について三宅善信理事長より報告がなされた。そして、本年度よりマイケル・パイ新会長体制の下、国内外での活動を拡充していく方針が発表された。

まず、本年度予算の中で今年九月にベルギーにおいて開催されるThe European Association of the Study of Religionsのシンポジウムに神道国際学会がパネル参加することや十一月には東京において第十七回国際シンポジウム『教派神道の謎と魅力』を開催することが提議され、また、来年度の充実した事業計画と、それにともなう予算についても提議された。

さらに、充実した活動を支えるために理事会の拡充を目指し、元英国国教会首座であるジョージ・L・ケアリー卿を理事・特別顧問として、また山階鳥類研究所長の奥野卓司氏、国際縄文学協会理事長の宮崎俊彦氏を理事として迎えることが提議された。これら全ての議題は満場一致をもって異議無く可決された。（新理事については三面参照）

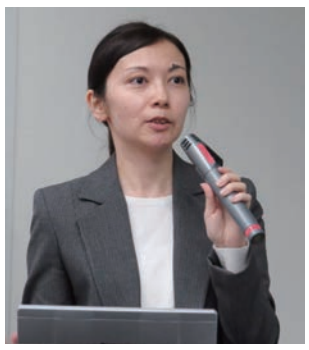
社員総会に続き、神道国際学会による第十九回国際神道セミナーが開催された。『日本人の死後の世界（異界）観』というタイトルに惹かれ、出席者一同、強い関心を持ってセミナーを聴講した。本セミナーでは古代、中近世、現代と時代を三つに区分し、それぞれに専門家を招いて日本人の死後世界のイメージというものがどのように変遷してきたのか解説した。この解説は多くの聴講者にとって、われわれが死というものをどう受け止めるべきなのかを考える道標となった。

セミナーでは、まず、マイケル・パイ神道国際学会会長より開会の挨拶があり、宗教学者という立場から死に関して討論する上でのキーワードとして行動と儀礼、感情などを示した。ま

講演に耳を傾ける出席者

た、外国人の目から見た日本人の死生観への興味を語り、セミナーでの討議に対する大きな期待を述べた。

さらに、三宅善信神道国際学会理事長より本セミナー開催の趣旨説明がなされた。三宅理事長は、昨今の若者文化においても前世や死後の世界というものが注目されていることを取り上げ、そのような興味関心に本会がどう応えていくべきかという視点で本セミナーを開催する旨を述べた。


アンダソヴァ・マラル氏

セミナー第一部では、カザフスタンのアンダソヴァ・マラル氏が『古事記』研究を中心に、記紀神話における日本人の異界観を解説した。『古事記』のイザナキ・イザナミの神話などの表現をつぶさに検証することで、古代日本人が垂直的世界観を持ち、死後の世界を地下世界だと考えていたという説と、水平的世界観を持ち、死後の世界を海の向こうなど遠い国として捉える考え方であったという二つの説を丁寧に説明した。われわれ日本人が幼い頃から親しんできた神話の中にも、このように先人の思考・思想を分析するヒントが隠れていることを、外国人研究者の口から教えられ、出席者一同、興味深く聴講していた。

絵図を解説する今井秀和氏

第二部では、日文研の今井秀和氏が中近世の日本人にとっての死後の世界観を「化け物」という意外な切り口から解説してみせた。日本人の社会生活・文化が成熟していく時代において、宗教的戒めの意義を持っていた地獄や妖怪といった存在が、時代の変遷に従って怖さを演出する一種の娯楽的要素を帯びていったことを軽妙な口調で説明した。このような変遷の裏側に、中近世日本人にとって死後の世界の現実味というものが変化していったことが窺えた。絵図を多く使用して説明する今井氏の講演に対して、聴講者からはもっと時間をとって解説を聞きたいという要望が数多く寄せられた。

鈴木岩弓理事

第三部では、本会理事の鈴木岩弓氏が現代日本人が死後の世界をどのように捉えているのかを東日本大震災をテーマに解説した。鈴木氏は東北大学の大学院教授の職にあり、宮城県を中心に東日本大震災の直後から多くの事例を集めて研究を重ねている。震災までは平常の生活圏であった場所が、突然のしかも多くの死者の発生によってどのような場所として捉えられていったのか、そしてどのようにして平常の生活圏に戻っていったのかを説明した。東日本大震災という未だ記憶に新しい悲惨な事象を取り上げつつも、鈴木氏のユーモア溢れる語り口に、会場は度々笑いの渦に巻き込まれた。

プログラム後半のパネルディスカッションでは、基調講演を行った三氏に本会理事のアレック・ベネット関西大学教授を加え、三宅理事長をモデレータとして議論を深めた。ベネット氏は三氏の講演を受けて、死後の世界についての考え方が氏の母国ニュージーランドの原住民マオリ族と日本人の間でいかに共通点が多いかを豊富な具体例を挙げながら指摘した。また、京都の野宮神社より聴講に訪れた懸野直樹宮司より死者に対する想いの移ろいについて質問がなされ、それに答えてマラル氏は母国カザフスタンで現代も続く死者の悼み方、祀り方にも、いかに現代日本の習俗との共通点が多いかを説明した。聴講者一同、はるか遠い国であっても、死者に対する人々の想いは同じであることに対しあらためて感じ入っていた。

さらに、三宅氏はモデレータとして今井氏が基調講演では語りつくせなかった化け物観について、また鈴木氏が現地調査を続けている恐山をはじめとする東北各地の民間信仰について、次々に興味深い視点を引き出していった。

聴講者からの質問に答えるパネリストたち

聴講者も交えたディスカッション

これらの議論に対し、会場で聴講していた元駐日スーダン大使のムサ・M・オマール博士は、一神教であるイスラム教徒としての立場からセミナーに対する感想を述べ、また日本の大学で宗教学を教える立場から、宗教というものを理解するためのポイントを指摘した。博士にとって神道に基づく本会が死後の世界を語るということ自体が驚きであったそうだが、それこそが日本では死後の世界はもっぱら仏教に拠るという認識がされていることの表れであった。本会としても、より広い神道の世界を世に伝えていく使命を再認識させられたコメントであった。

神道国際学会では今後も学術研究と一般の理解をつなぐセミナー、シンポジウムを開催していく予定である。

新理事ご紹介

奥野卓司
（おくの・たくじ）

鳥にせよ獣にせよ、ペットにしても、日本人と生き物の関係を語る時には、どうしても神道を考えなくてはならないと実感してきました。

イザナギとイザナミがセキレイから交道（性交のし方）を学び、国産みをした。アマテラスに天岩戸をあけさせようと鶏の鳴き声をきかせた。八咫烏が、神武天皇を大和の橿原まで案内したというように、記紀の節目節目に鳥が登場します。日本神話が語られた物語であって、その内容は書き換えられてはいても、今日も日本の神社や祭礼には、その紋章に、絵巻に、伝承に、様々な鳥の姿が表象されているのは、日本人と鳥の浅からぬ関係を意味しています。

これをさらに世界の故事、伝承と比較して、国際的な視点で解読しようとすると、より難しいと感じます。そういう思いで国際神道学会に所属させていただいたところ、三宅善信先生のご推挙によってこのたび理事に就任させていただくことになりました。

ぼくは大学院までは動物学を専攻していましたが、その後、文化人類学に移行し、今はそれを総合した公益財団法人山階鳥類研究所所長を務めています。理系から文系に移っただけでも異例な経歴ですし、文化人類学がアニミズムやトーテミズムなど原初的な宗教を対象にしているとはいえ、直接、現代の宗教を語ることはあまりないでしょう。

それゆえ、皆様から教えていただくことは多くとも、十分に寄与できるか、自分でも非常に心もとないのですが、この学会に他分野からの知＝血をいれることで、新たな展開をしていただければと、心から願っています。

どうかよろしくご指導ください。

宮﨑俊彦
（みやざき・としひこ）

今期、当学会の理事にご選任頂きました宮﨑俊彦です。会社経営の傍ら、NPO法人国際縄文学協会の理事長を務めております。

「縄文」という時代について、皆様はどんな印象をお持ちでしょうか。近年では一時、小学校の教科書に「縄文時代」が載らない時期がありました。また、かつては司馬遼太郎氏も、縄文時代を「文明という光源からみれば（中略）闇の時代」と述べており、未開・野蛮の印象を持つ方が多いかも知れません。「いや、印象云々と言うより、興味がないです」。そんな、誠にもっともな声がいちばん多そうですね。

しかし「世界最古級の土器が、実は日本で発掘されているのです」などと話すと、少し興味を持って頂けたりします。縄文の土器製作技術は世界的にも優れており、１万２千年も前に、何と薄さ５ミリの土器が作られていました。また縄文期は、世界でも稀なほど争いが少ない時代でした。１万年間「戦争がなかった」時代、と位置づける研究者もいるほどです。そして、岡本太郎氏が再発見した「縄文土器の美」。火焔土器や「縄文のビーナス」と呼ばれる土偶は、縄文人の豊かな精神性を想起させます。「宗教」という名で認識されてはいなくとも、大自然への素朴な畏敬や信仰が、そこには息づいていました。美・和・母性などのキーワードで紐解かれる、こうした縄文人の世界に、日本精神の源流を感じ、魅了される日々です。

……と、さも訳知り顔に書きましたが、私自身は経済学部卒でして、縄文については「門前の小僧」に過ぎません。専門家の方々が自由に議論・発信できる環境作りを心掛け、実務面で立ち働く立場です。神道研究については、縄文以上に門外漢の身ですが、同様の心掛けで微力ながらお役に立てればと願っております。今後とも、どうぞ宜しくお願い申し上げます。

お知らせ

第17回国際神道シンポジウム『教派神道の謎と魅力』

神道国際学会では来る11月11日（土）に、第17回国際神道シンポジウム『教派神道の謎と魅力』を開催いたします。シンポジウム第一部では米国ハーバード大学のヘレン・ハーデカ教授をはじめ、海外の著名な研究者を招き、豊富な事例をもとに教派神道についての学術的な考察に挑みます。それを受けて、第二部では教派神道各教団より教主や管長クラスの宗教指導者を招き、実際の活動について発表・討論を行います。本シンポジウムによって、教派神道について、また教派神道が日本人の文化・精神面にいかなる影響を与えているのかについて、明らかにする試みです。なお、講演は全て日本語（通訳なし）となります。

●日時：2017年11月11日（土）　13:00 ～ 16:30（開場12:45）
●会場：フクラシア東京ステーション　会議室5K
東京都千代田区大手町2-6-1　朝日生命大手町ビル5F

聴講は無料ですが、定員は120名で事前登録が必要です。聴講ご希望の方は、「第17回国際神道シンポジウム聴講希望」と明記の上、①聴講者氏名、②会員番号（本学会会員の場合）、③連絡先電話番号、④聴講票送付先住所を添えて、メール、ファックスまたは郵便にて事務局までお申込みください。また、本会ホームページ（http://www.shinto.org）からもお申込みいただけます。お申込みいただいた方には10月下旬より聴講票をお送りいたします。電話でのお申込みは受け付けられませんのでご注意ください。
なお、定員に達し次第締め切らせていただきます。締め切りのお知らせは本会ホームページに掲載いたします。

※聴講申し込み先
〈神道国際学会事務局〉
〒158-0096 東京都世田谷区玉川台2-1-15　ベスト用賀2F
Email: info@shinto.org　Fax：03-6805-7769　URL：http://www.shinto.org

※お問い合わせ
Email: info@shinto.org　Tel：03-6805-7729

国際シンポジウム「不可視の帝国：近現代日本における霊魂とアニミズム」
(Invisible Empire: Spirits and Animism in Contemporary Japan)

ファビオ・ランベッリ（カリフォルニア大学サンタバーバラ校教授）

2017年2月25日～26日、カリフォルニア大学・サンタバーバラ校において、神道国際学会神道研究寄付講座（ISF Endowed Chair in Shinto Studies＝主任ファビオ・ランベッリ教授）の国際シンポジウム「不可視の帝国：近現代日本における霊魂とアニミズム」（Invisible Empire: Spirits and Animism in Contemporary Japan）が開催された。このシンポジウムは、近現代日本文化における霊魂観（霊／魂に関する言説や表象）や、その基盤にあると思われるアニミズム的思考の背景を探るもので、多くの関心が寄せられた。シンポジウムのホームページはhttp://www.eastasian.ucsb.edu/invisible-empire/

日本文化の多くの分野のなかには、様々なかたちによる「霊魂」の言説化や表象が見られるのだが、その頻度と多様性は現代日本文化の一つの大きな特徴だと言えるだろう。ある意味では、多くの日本人にとって、日本には日常生活の「見える世界」の他に霊魂が棲んでいる「見えない国」のようなものが存在するようだ。この日本の存在論の二重構造がとても興味深い文化的な現象であり、このシンポジウムの一つの大きなテーマでもあった。

また、興味深いことに、近現代日本の霊魂観やアニミズムはたまに宗教団体（特に新宗教）によって積極的に展開されているのだが、多くの場合、むしろ「宗教」とは別の次元で存在するように思われる。明瞭に展開された宗教や哲学なしに、どのようなかたちの霊魂観が言説化できるのかは、このシンポジウムのもう一つのテーマであった。

発表を行うランベッリ理事

さらに、霊魂論やアニミズム論は多くの分野、かたちで展開されるのだが、基礎的かつ中核的な観念／信念があるかどうかは、疑わしい。むしろ、多くの作者が日本の伝統的なもの（主として陰陽道や密教）、欧米から導入されたもの（オカルト）や、個人的に創造＝想像されたものを組み合わせて、それぞれの霊魂論を提示しているように思われる。これらの霊魂論はまた、マスコミによって普及し膨張されていくのである。したがって、現代日本のアニミズム言説におけるマスコミや大衆文化の役割が重要なポイントであり、このシンポジウムではこれも取り上げた。

しかしながら、我々の周りに霊／魂がつねに彷徨い、様々なかたちで我々の世界や日常生活に影響を与えるという発想は、近現代日本に初めて現れたわけではない。妖怪ブームは新しい現象ではあるのだが、何らかのかたちでアニミズム的な思考の存在は古い時代から認められる。江戸時代の妖怪や、それ以前の祖先信仰、御霊信仰、多様なカミの信仰などなど――これらはすべて、現在のアニミズムに多かれ少なかれ繋がっていると思われる。

現代の霊魂観の「先祖」と呼ばれるのは、いうまでもなく、平田篤胤であった。我々人間の「見える世界」と神や死者の「見えない世界」からなる彼の独特な存在論と宇宙論は、現在のアニミズムの中核だと思われる。平田篤胤から大本の出口王仁三郎へと、それから大本と関係する新宗教（真光、幸福の科学、ワールドメイトなど）などが、篤胤の世界観を継続させたのである。また、作家の荒俣宏、学者の小松和彦、アカデミズム作家の中沢新一などが、マスコミを通じてこの世界観をさらに展開させ、普及させていった。

それもあって、霊魂観やアニミズム論は当たり前のことのように、真剣に取り上げられることがあまりない。しかしながら、アニミズム論はいくつかの大きな問いかけを引き起こすテーマである。例えば、霊魂は社会的・心理的な現実のメタファーなのか、それとも実在するものなのか。前者であれば、なぜ日本では（多くの先進国とは違って）それらの社会的心理的な問題は霊魂論として表象されているのか。また、後者であれば、霊魂の存在論的な資格とは何か。同じように、「アニミズム」も通説のように取り上げられる傾向があるのだが、それは本来、文化人類学や宗教学の専門用語であり、約一五〇年前に近代の中に取り残された前近代的なものや未発展社会の信仰（迷信）を説明するために造語されたことばである。したがって、それは中立のことばではなくて、むしろ複雑な含意を孕むことばとして認めなければならない。

これらの文化的・社会的な現象や歴史的・理論的な枠組みを背景に、このシンポジウムを開催した。発表者は様々な分野や観点からそれぞれのテーマを展開させた。霊魂観やアニミズム論の制作の場（マンガ、アニメ、映画、マスコミ）の他は、その具体的な内容（存在論、宇宙論）や表象論などは、いろいろなかたちで取り上げられた。

発表者：ジェーソン・ジョセフソン Jason Josephson（ウィリアムズ大学）「日本近代思想における西洋的なオカルトについて」、カリナ・ロート Carina Roth（ジュネヴ大学およびカリフォルニア大学・サンタバーバラ校）「パワースポットと日本の拡散的宗教性」、マウロ・アッリギ Mauro Arrighi（ヴェローナ美術アカデミーおよびサウスハンプトンソレント大学）「テクノ・アニミズム：日本のメディア・アーティストとその神道的・仏教的背景」、アンドレア・カスチリオーニ Andrea Castiglioni（カリフォルニア大学・サンタバーバラ校）「君の名は？現代映像文化における霊的交差と空間的両義性」、エレン・ヴァン・フーテム Ellen Van Goethem（九州大学）「霊の宿る京：京都における気、霊的守護者と現代建築」、レベッカ・スーテル Rebecca Suter（シドニー大学）「近現代日本文学の精神／精霊」、ジョリオン・トーマス Jolyon Thomas（ペンシルベニア大学）「アニメにおける霊魂」、ファビオ・ランベッリ Fabio Rambelli（カリフォルニア大学・サンタバーバラ校）「見えない世界の形而上学：南方熊楠の精霊観と宇宙曼陀羅」

この国際シンポジウムは、カリフォルニア大学・サンタバーバラ校神道国際学会神道研究寄付講座主催で、共催や後援にはカリフォルニア大学・サンタバーバラ校の文学部、総合人文研究センター、東アジア学科、宗教学科、東アジアセンター、美術史・建築史学科、英文学学科、フィルム・メディアスタディーズ学科、比較文学プログラムがあり、全学的に興味を引き起こしたイベントであった。

神道と妖怪（前編）

今井秀和（国際日本文化研究センター 機関研究員）

江戸川北輝『本朝振袖之始素盞鳥尊妖怪降伏之圖』（国際日本文化研究センター蔵）

神道と妖怪。こうして並べただけでは、何の関係もないように見えるかもしれません。しかし、仮にこれを「神と妖怪」と言い換えてみれば、どうでしょう。少し共通点が見えてきませんか？

たとえば古代の『古事記』や『日本書紀』には、「悪しき神」などと表現される、災いを起こす神が登場します。『日本書紀』の「蠅声邪神（さばえなすあしきかみ）」は、騒がしい音を出す厄介な存在です。当時、こうした神々がどのような姿で想像されていたかは分かりません。

ただ、古代よりずっと下った時代には「蠅声邪神」たちが奇妙な姿の怪物として描かれることもありました。『本朝振袖之始素盞鳥尊妖怪降伏之圖（ほんちょうふりそでのはじめすさのおのみことようかいごうぶくのず）』という浮世絵には、スサノヲやクシナダヒメによって退治される「蠅声邪神」が、様々な鳥あるいは何かの道具かと思われる奇妙な姿で描かれているのです。

また、現在の口語表現にも用いられる「貧乏神」や「疫病神」などの民俗信仰における神々も、人にとって良くない事象（経済的困窮、疾病）をもたらす存在にも関わらず、なぜか「〇〇神」と呼ばれています。

「神」という日本語だけを聞けば、普通は善なる存在が想定されるでしょう。しかし、日本の神は必ずしも人にとってよいものとは限らないのです。あらためて考えてみれば、不思議な話ですね。

こうした悪しき神々は、人を喰う鬼や、人を神隠しに遭わせる天狗といった、人間に危害を与えることのある妖怪たちと、どこか似ているようにも思われます。「神隠し」という言葉自体、行方不明になった人をどこかに隠した存在として、何かしらの神格を想定しているわけです。その神格とは、ときに山の神であり、ときに天狗や狐などでした。

また、日本各地には、鬼や天狗や河童を祀った神社やお寺があります。こうした寺社においては、一般的に「妖怪」などとして認識されている超自然的な存在が、「神」として祀られているのです。

それではなぜ、多くの場合において妖怪と見做されている存在が、場所によっては神として祀られ得るのでしょうか。大雑把に言ってしまえば、鬼や天狗や河童や、あるいはその他の妖怪たちも、『古事記』や『日本書紀』に載っているような神々と同じく、人間にとっての善／悪の区別に関係なく、人知を超えた一種の「神」的な存在―広い意味での〈カミ〉―として日本人に認識され続けてきたのです。

文化人類学・民俗学者の小松和彦は、こうした問題について考える際の指標として、祀られた超自然的な存在が「神」、祀られない超自然的な存在が「妖怪」だという、実に明快な区分を提唱しています。また、両者は固定的・対立的な関係ではなく、常に変動する可能性を宿してもいます。

つまり、かつて村の祠に祀られていた神であっても、ないがしろにされれば人に障りを為すことがあります。また逆に、たびたび悪さをする野狐がいた場合、稲荷社を作ってこれを祀ればピタリと悪事が止む、といったこともあるわけです。実は古来、日本人の認識において神と妖怪とは、常に表裏一体の関係性であり続けてきたのです。

「神道」が「神」への畏敬を根幹としたものであるならば、その裏面であるところの「妖怪」について考えておくこともまた必要なことのように思われます。次回は、江戸期に描かれた妖怪画の中に見いだせる「神道」的な要素について考えてみたいと思います。

連載 神道ＤＮＡ

『神々は海から来た？』

金光教泉尾教会 総長／（株）レルネット代表　三宅善信

本誌第54号の「神社巡り」シリーズで、ファビオ・ランベッリ教授は「志賀海神社」を取り上げ、本号では私が「宗像大社」を取り上げた。両社に共通するのは「海」という存在である。日本文化の源泉を探る時、ややもするとわれわれは、当時の「先進国」であった中国大陸とその東端にある朝鮮半島から伝わった文物に目を向けがちであるが、何か肝心なものを見落としてはいないだろうか？

確かに、記紀をはじめとする歴史書は漢字で記録され、また、それらを編纂させたのも律令国家という隋・唐帝国の影響下に成立した統治システムである。しかし、そこに描かれている日本神話の世界は、大陸に起源を持つ儒教や道教のそれとはまったく別の価値観に根ざした世界である。母系社会や若衆宿（若者組）という家族形態にしろ、高床式住居という建築様式にしろ、褌（ふんどし）に刺青（いれずみ）という服飾様式にしろ、古代の日本人は、より多くの影響をポリネシアの島々の漁労社会文化から受けている。

平安時代中期に編まれた『延喜式神名帳』において、特に霊験のあらたかな神社として「明神大社」の列に加えられている神社名を見ると、西海道では、宇佐神宮や阿蘇神社など「九州本土」に鎮座する社が十一座であるのに対して、壱岐の住吉神社や対馬の和多都美神社など「離島」に鎮座する社が十三座もある。古代日本において、いかに「島」が重要視されていたかということである。東海道の伊豆国でも、五つある明神大社の内、二つは神津島に鎮座している。三嶋大社をはじめ三つある伊豆半島「本土」にある明神大社も、山の神であるオオヤマツミを祀る沼津市の楊原神社を除けば、元々、神津島の物忌奈命神社に祀られていた神（コトシロヌシ？）が、伊豆半島の最南端にある伊古奈比咩命神社に祀り替えられ、さらに、伊豆半島の付け根に鎮座する三嶋大社に祀られたのである。

その名もずばり「神の島」という意味の神津島の他にも、伊豆大島、御蔵島、式根島、新島、利島、三宅島、八丈島など、現代の交通手段をもってしても容易に到達することが困難な伊豆諸島の火山島のそれぞれに、古代から神社が鎮座していることをなんと考えれば良いのであろうか。答えは簡単である。日本人の先祖は、本州から各島々に拡散していったのではなく、むしろ、ポリネシアの何処かの海域から島伝いにこの国を目指してやってきたと考えたほうが、九州にしろ伊豆諸島にしろ、島々により重要な神々が祀られていることの説明がつく。

そう言えば、古事記においてイザナギ・イザナミの両神が、陸地の存在しなかった原始の海を掻き回して「国産み」をする際に、両神が降り立つための最初の陸地であるオノコロ島に続いて、淡路島・四国・隠岐・九州・壱岐・対馬・佐渡島・本州（以上が大八島）の順で島々を産み、続いて、瀬戸内海に浮かぶ児島・小豆島・周防大島・姫島と長崎沖の五島列島・男女群島の六つの島々を産み出した。その後に、八百万の神々を生み出すのである。つまり、はるか神代の昔、この国に最初にできたのは島々であって、かつ、その島々も「本土」からかなり離れた島々に至るまで描写されているということは、古来より日本人（の祖先）は、操船技術に長けた海洋民族であったと考えるほうが自然である。

二十世紀半ばに至ってなお、日本海に実在する島を正確に知らなかった韓国人は、敗戦国日本の領土を確定させるためのサンフランシスコ講和会議の直前に、米国に対して鬱陵島や竹島に加えて、波浪島や離於島などの「架空の島」まで領土主張をしたことからみても、こと海洋に関する彼我の知識の差は2000年以上離れていると言っても過言ではない。同様の関係は、南シナ海における中国とフィリピンやインドネシアなどの島国の関係においても言えるのである。神道について学ぼうとする者は、もっと「海」について関心を持たなければならないのではなかろうか。

話題のこの人

儀礼・図像・写本…中世日本における密教の実態に照射する

ガエタン・ラポー博士

ハーバード大学[人文学系大学院]研究員

仏教と神道の混ざり具合や状勢にも着目

中世日本の仏教、特に密教の実態を解明すべく、儀礼テクストや図像、そして歴史背景などへ視点を巡らし、考察に取り組んでいる。「西欧の宗教研究には、儀礼や芸術、思想、時代性などから、総合的に見ていく傾向があるんです」

二〇〇七年から一四年まで、ジュネーブ大学（スイス）で博士課程に在籍。その間、来日して東京大学史料編纂所にも籍を置いた。滞在中は、名古屋大学教授の阿部泰郎氏とも交流し、「同氏から大いに影響を受けました」。後醍醐天皇の護持僧となった真言宗の文観房弘真の写本の、阿部氏による解析に示唆を受けながら、文観の密教思想の解釈に関する知識を蓄積した。

同時に、仏教美術の研究方法を取り入れるため、早稲田大学教授の内田啓一氏にも師事。密教芸術にも才能を発揮した文観が関わる画像群の究明に力を入れた。

これらの研究成果の一つが、最新の論文『いわゆる「赤童子」図（日光山輪王寺・大英博物館・大阪市立美術館）の検討―文観による「三尊合行法」の本尊図像化の一例として―』（今年一月『佛教藝術』三五〇号）だ。そこでは、対象の「赤童子」図像の制作された源泉には文観の聖教が濃密に関わること、また文観が著した『御遺告大事』の読解を通じて、「赤童子」の尊格には童形としての空海（弘法大師）像が仮託されていること――などに論及している。

また今秋には、『中世日本における「邪教」言説とその後―文観房弘真の生涯と死後の評価』（フランス語）が刊行される。同書では、異端僧と曲解された文観像が形成されていった過程を解釈するとともに、その儀礼と著作を詳述する。「文観は聖天の供養をしたり、後醍醐天皇に密教灌頂を授けたりしているので、中世の〝異形〟と考えられた時期もあった。しかし、後醍醐王権の源泉に密教があったのは確かだが、当時の時代背景や社会的側面というものがあって、その中で、彼や彼らのそうした思考や行動が出てくるのは異様なことではなかったはず」と見ている。

一方、文観の思考や両部神道に出てくる空海・天照大神の同体説の分析も試みている。その一環として、『大神宮本地』のような真言系の中世神道書の翻刻・解読も進める。間もなく刊行の『中世神道入門（仮題）』（勉誠出版）では、「文観と神道」「欧米における中世神道研究」の項目を担当執筆している。

神道との絡みを見ても、中世日本の宗教実態を探るのは、なかなか単純ではないと語る。「ひとくちに神道と言っても、神道が独立した信仰になっていたのか。仮に独立したとしたら何時の段階なのか――」。こうした神信仰と仏教との混ざり具合を考えることは、「今後の自身の研究における方向性として、大きな観点になる」と話した。

◇

ジュネーブ大で宗教学を学び、同時に日本学も選択。日本宗教史が専門。東大史料編纂所外国人研究員、早大リサーチフェローなどを経て博士（ジュネーブ大）。現在はハーバード大大学院客員研究員。

神社巡り⑨

三宅善信
金光教泉尾教会 総長／㈱レルネット代表

宗像大社

●福岡県宗像市田島2331（辺津宮）

玄界灘の荒波が打ち寄せる地に「最古の神社」のひとつ宗像大社は鎮座する…。といっても、通常、われわれが「宗像大社」と呼んでいる神社は、宗像大社の一部である「辺津宮（へつみや）」のことで、「宗像大社」とは、正式には、沖ノ島の沖津宮、筑前大島の中津宮、宗像市田島の辺津宮の三社の総称である。それらの位置関係は、イチキシマヒメを祀る辺津宮のある福岡県宗像市の海岸から11km沖合の筑前大島に鎮座するのがタギツヒメを祀る中津宮であり、その49km沖合の孤島沖ノ島に鎮座するのがタキリビメを祀る沖津宮であり、そのさらに145km先にあるのが古代朝鮮半島における日本の窓口「任那（伽耶）」である。

宗像大社沖津宮と中津宮の遙拝所が並ぶ

このことからすぐに、「わが国の主要な文化は、当時の〈先進国〉であった中国大陸や朝鮮半島から伝わった証拠である」と結論づける向きもあるが、それは短絡的な見方である。平安時代中期に編まれた『延喜式神名帳』によると、特に霊験のあらたかな神社として「明神大社」の列に加わっている神社名を見ると、西海道（現在の九州）では、宇佐神宮や筥崎宮や阿蘇神社など「九州本土」に鎮座する社が十一座であるのに対して、壱岐の住吉神社や対馬の和多都美神社など「離島」に鎮座する社が十三座もある。古代日本において、いかに「島」が重要視されていたかということである。それらの中で最も有名なのが朝廷からの崇敬も厚い宗像大社である。

宗像大社辺津宮の本殿

宗像大社の三つの社に鎮座する三柱の女神は、アマテラスに謀反の疑いをかけられたスサノヲが、その疑いを解くために宇気比（誓約）をした際に、アマテラスがスサノヲの持っている十拳剣（とつかのつるぎ）を受け取って噛み砕き、吹き出した息の霧から生まれた神々である。彼女たちは、天孫ニニギを助けるために神勅を奉じて玄界灘の島々に降り立った。記紀に記載されている神々の中で、「天から地へ降り立った神々」は、この三女神とニニギのみである。後の神功皇后の「三韓征伐」の際にも、航海安全が祈願され、摂津国の生田神社・廣田神社・長田神社（神戸市）や住吉大社（大阪市）との関係も深く、古代国家の成立とも因縁の深い神社である。

官幣大社として国家の手厚い保護を受けていた時代はもとより、武家の時代になっても、宗像大社は歴代の支配者から厚い崇敬を集めていた。大東亜戦争による九州本土の荒廃も、実業家出光佐三の寄進によって辺津宮の境内が復興し、さらには、出光の政府への働きかけによって沖津宮のある沖ノ島祭祀遺跡の調査発掘が行われた結果、絶海の孤島にあったが故に奇跡的に保存された学術的にも貴重な古代の祭祀遺跡と出土品が大量に発見され、八万点にもおよぶ出土品がそっくり国宝に指定されるなど「神宿る島」として、古代日本人の宗教心を調べるための貴重な資料となっている。

2017年7月のユネスコ「世界遺産」指定によって、今後多くの観光客がそこを訪れることを希望し、行政レベルでも観光促進を図るであろうが、古代から「神宿る島」として、何人たりとも勝手に入島することが禁じられ、仮に上陸が許可されたとしても、所定の所作に従って海岸で禊ぎをし、神饌物以外は何物を持ち込むことも、また持ち去ることも許されない「日本人の心のふるさと」として、未来永劫保存されていくように願わざるを得ない。

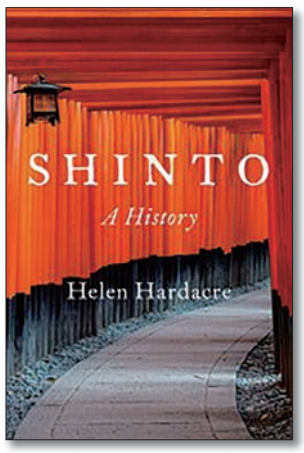
書 評

Shinto: A History

Helen Hardacre［著］

Oxford University Press、2016年12月1日刊、720ページ、ISBN 978-0-19062171-1、$39.95

評／Mark Teeuwen（オスロ大学教授）



2017年は、700ページを超える英語の神道概史が出版された年です。これほど詳しく、幅の広い神道史の入門書は日本語でさえ存在しないのではと思います。全16章からなり、弥生時代から「平成神道」まで、そして儀礼と信仰から組織とその経済的基盤まで、神道のあらゆる面がカバーされています。参考文献のリストを見るだけで圧倒されますが、実は日本語と英語での研究を網羅するにとどまらず、オリジナルな研究成果まで提出している傑作です。外国語で書かれた神道研究書として、歴史に残る労作と言うほかないでしょう。

こういった概史のような本ではあまり取り上げられることのない、新鮮なテーマもいくつか含まれています。例えば、近世中期に関西で活躍していた「稲荷さげ」などと呼ばれた女性の「霊能者」たちや、三都で祈祷を行っていた「神道者」の活動が第9章で描かれています。第15章は、都市祭りの近現代における変遷を追っています。府中市で行われる暗闇祭の戦後史を事例に、祭りと観光、公の場で祭りにかけられる制限とその具体的な変容なども丁寧に分析されています。これらの例にも見られるように、ハーデカ氏は「神道」という抽象的な思想や言説よりも、社会の中に根ざした場、人、そして組織に目を向けているのです 。神道思想が神社とその氏子に強い影響を及ぼした明治から敗戦までの時代でも、ハーデカ氏は理念やイデオロギーだけではなく、明治8年から昭和14年までの国庫歳出神社費・伊勢神宮費・神職養成費などの具体的な国家予算からの「神道」関連出費を付録の形で紹介しています。レトリックと現実を比較することによって、いわゆる国家神道の社会の中での重みを測る方法として、非常に効果的なアプローチでしょう。

しかしながら、この本には重大な問題点もあります。この本の構造が、弥生時代から現代まで「神道」という固有の「宗教制度」が存在したという理解を前提にしなければ成立しない形になっているからです。そういう意味で、黒田俊雄の議論だけでなく、井上寛司著『「神道」の虚像と実像』（講談社現代新書2109、2011年）、伊藤聡著『神道とは何か―神と仏の日本史』（中公新書2158、2012年）、そしてJohn Breen & Mark Teeuwen著『A New History of Shinto』（Blackwell Pub, 2010年）とは根本的に違った見方をしています。ハーデカ氏は黒田氏が1970年代に唱えた神道非連続論を、限定した事態に関しては積極的に認めながらも、全体としては連続性を強調する議論を展開してきているのです。そして、その連続性の所在として、神道の「固有性・土着性」と「公共性」をあげています。古代の神祇祭祀がすでに固有性と公共性を重視するレトリックを伴っていたという主張が、連続性を主張する基盤になっています。

しかし、神道が日本固有の、公の宗教制度と定義されたのは近世後期、特に明治以降のことではないでしょうか。特に古代・中世の「神道」を紹介する章では、このような「明治的な」レンズを外さないことには、神社・神・祭りのその時代におけるコンテクストと意義を素直に掘り起こすことは不可能だと思われます。

「平成神道」と題する第16章には、「神道アニミズム」論、パワースポットブーム、日本会議の浮上など、意外に取り上げられていない 側面が多くあります。この章で特に興味深いのは神社経営のモデルについての議論です。 自治体の関係者が氏子総代になる神社が多く、政教分離の原則を厳重には守れないと言う神職たちの危惧が綴られています。神社は、地域社会を守る「非宗教的な」文化センターなのか、または宗教法人として「信者」のニーズに応えるための宗教施設なのか、曖昧なところがどうしても残るという点がはっきりと伝わってきます。氏子制度でいいのか、または地域を超えた崇敬会に頼った方が活発な活動を可能にする将来性のあるやり方なのか。神社によって、性格と事情が違うので一概には言えない問題でしょうが、このハーデカ氏の指摘は、神社界の最も重大で根本的な課題に焦点を当てているように思います。

歴史 絵葉書 シリーズ④

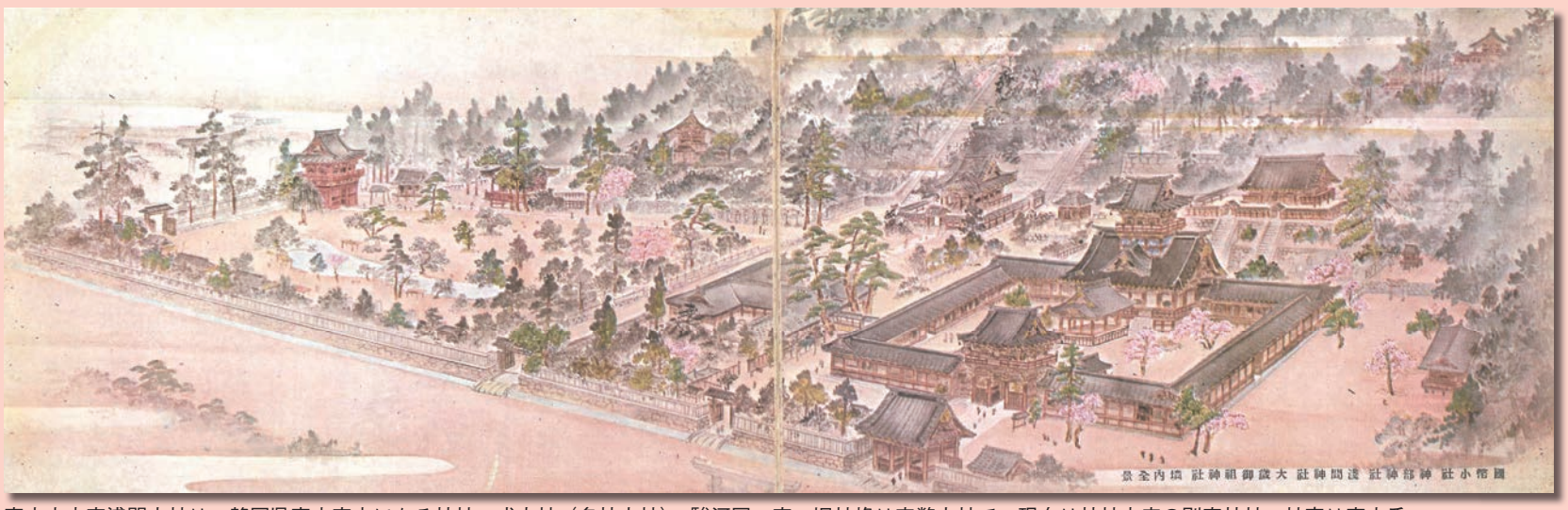
富士山本宮浅間大社（ふじさんほんぐうせんげんたいしゃ）

マイケル・パイ（マールブルク大学名誉教授）

この2枚の絵葉書に渡って広がる素晴らしい景色は、富士山本宮浅間大社を描いたものです。社寺の境内と建物を絵地図のように表す手法は曼荼羅から発生したものであり、日本では伝統的にとられてきた手法です。ただし、今回この手法がとられているのは20世紀に入ってからの絵葉書で、大正7年から昭和8年の間のものと推測されます。プロペラ機が既に活躍していた時代でもあり、まるで航空写真をもとにして描かれたかのように見えますが、そうではなく曼荼羅の伝統に則って制作されたものと思われます。

富士山本宮浅間大社は全国1000社を超えるネットワークを誇る浅間神社の総本山であり、熱心な富士山信仰を支えてきた神社です。特に関東地区においては、容易に登れる標高数メートルの富士塚を造営している浅間神社もあります。というのも、全ての人が本物の富士山に登れるほどの時間的・肉体的余裕を持ち合わせているわけではないからです。

本宮は静岡県富士宮市にあり、そこでは人々の心からの欲求を満たすため、富士山が描かれた絵馬を求めることができます。何しろこの絵馬を求めることによって、富士山登頂の巡礼をほんの短時間に短縮して叶えることができるのです。



富士山本宮浅間大社は、静岡県富士宮市にある神社。式内社（名神大社）、駿河国一宮。旧社格は官幣大社で、現在は神社本庁の別表神社。社家は富士氏。

理事の業績・研究報告

三宅善信理事長

1月28日　来日したバチカンのポール・ギャラガー外務長官とローマ法王庁大使館にて石原伸晃経済財政大臣らと共に会談

教皇庁のポール・ギャラガー外務長官と

2月13日　善光寺で仏教の東漸についてのフィールドワークを行う

4月19～20日　オランダで開催されたＩＡＲＦ国際評議員会に出席

5月25日　キャンパスプラザ京都で開催された宗教倫理学会研究集会で『神道と倫理についての一考察』と題した発表を行う

宗教倫理学会で研究発表を行う

5月29日　清水寺で核兵器禁止条約推進署名キャンペーンを行う

6月15～17日　ドイツで開催されたＧ20諸宗教サミットで、西欧正教会首座主教やトルコ外務次官らと共に『宗教と持続可能な開発』に関するパネルで発表を行う

ポツダム大学で開催されたG20諸宗教サミットで発表

6月22日　リーガロイヤルホテルで開催された国際宗教同志会70周年記念総会を事務局長として運営。同講演録二巻を編纂、刊行。

鈴木岩弓理事

【論文】

2016.08.25「経文聴取による喪失悲嘆ストレスのケア」（谷山洋三・得丸定子・奥井一幾・今井洋介・森田敬史・郷堀ヨゼフ・カールベッカー・高橋原と）『仏教看護・ビハーラ』第11号，仏教看護・ビハーラ学会

2016.11.10「死者と生者の接点」『震災学』vol.9、東北学院大学、pp.37-43

2017.03.25「『宗教者』と『臨床宗教師』―公共空間における宗教の位置―」『熊本地震シンポジウム講演録２０１６　東日本大震災から熊本地震へのバトン』、熊本大学拠点形成研究Ａ「紛争解決学・合意形成学の拠点形成」、pp.118-128

2017.03.30「霊と肉と骨―現代日本人の死者観年―」智山勧学会編『葬送儀礼と現代社会』、青史出版、pp.85-139

【講演など】

2016.11.05「〝死者の記憶〟のメカニズム」"Shinto Studies Today"神道国際学会研究発表会

2016.11.12「日本社会における死生観―墓を通じて観念を知る―」中国：江西佛学院文化講演会

2016.11.13「臨床宗教師の誕生と展開―被災者支援から超高齢多死社会へ―」中国：曹山佛学院

2016.12.05「『宗教者』と『臨床宗教師』―公共空間における宗教の位置―」（熊本地震復興支援シンポジウム「被災地における人々のケア―宗教者の役割とその連帯の可能性―」熊本大学）

2017.01.29「東北の被災地から超高齢多死社会へ―死に向き合う臨床宗教師―」佛教大学公開シンポジウム「死者儀礼の現代的地平へ」佛教大学総合研究所

2017.03.02「震災被災地から垣間見る死後世界」神道国際学会公開セミナー基調講演、コンベンションルームＡＰ東京八重洲

2017.03.04「被災者への心のケア」シンポジウム「ご縁」session1「仏教と災害」提言①、築地本願寺

2017.03.13「公共空間における『臨床宗教師』の立位置」日本宗教連盟第5回宗教文化セミナー「宗教者が担う社会活動―宗教教誨師、チャプレン、臨床宗教師―」、聖路加国際大学聖ルカ礼拝堂トイスラーホール

2017.03.25「現代社会の宗教者」臨床宗教師育成事業シンポジウム「生と死：今問われる宗教の役割」、鶴見大学大学会館

新刊紹介

『日出づる国」の山と海：大和・出雲・伊勢・「東西」「天地」の信仰軸』
伊藤通子、サンライズ出版、２０１７年、２０５２円

『日本人の信仰』
島田裕巳、扶桑社、２０１７年、８６４円

『イラストでよくわかる 日本の神様図鑑』
カワグチニコラ・吉川順弘、青幻舎、２０１７年、１７２８円

『史料にみる宗像三女神と沖ノ島傳説』
宗像善樹、右文書院、２０１７年、１７２８円

『神葬祭―その歴史を探る』
鎮守の杜ブックレット、神社新報社、２０１７年、５４０円

『現代祝詞例文撰集 ＣＤ付』
宮西修治、戎光祥出版、２０１７年、７３４４円

『日本人が知らない 神社の秘密』
火田博文、彩図社、２０１７年、６８０円

『神宮伝奏の研究』
渡辺修、山川出版社、２０１７年、７０２０円

『眠れないほどおもしろい「古代史」の謎：「神話」で読みとく驚くべき真実 王様文庫』
並木伸一郎、三笠書房、２０１７年、７０２円

『近現代神道の法制的研究』
河村忠伸、弘文堂、２０１７年、５４００円

『氏神さまと鎮守さま 神社の民俗史』
新谷尚紀、講談社、２０１７年、１７８２円

『共存学４―多文化世界の可能性』
國學院大學研究開発推進センター編、弘文堂、２０１７年、２７００円

『神話から現代まで 一気にたどる日本思想』
稲田義行、日本実業出版社、２０１７年、２１６０円

編集後記

皆様、神道フォーラム55号はお楽しみいただけましたか。今号でも新加入の理事のご紹介や、国際神道セミナーおよびカルフォルニア大学でのシンポジウムの記事、今秋開催予定の国際神道シンポジウムのご案内など多くの記事を掲載でき、本会の活動がますます盛んになっておりますこと、編集部としても嬉しい気持ちでお伝えしております。また、三月のセミナーでご講演いただいた今井秀和先生には今号・次号に「神道と妖怪」についての連載記事を頂戴しており、他の連載と共に誌面を盛り上げてくださっています。読者の皆様からも、神道フォーラムへのご要望やご感想などを随時募集しておりますので、本会事務局宛てにお送りいただければ、編集局一同、励みとなります。どうぞよろしくお願い申し上げます。

神道国際学会からのお知らせ

◎いつも社報や刊行物をお送りくださり、ありがとうございます。
◎ご入会のご案内：神道国際学会にはどなたでも入会できます。資料をご請求ください。

一般会員（年会費）	3,000円
賛助会員（年会費）	10,000円
（法人会員（年会費）	100,000円）
特別賛助会員（個人・一時金）	30,000円
特別賛助会員（団体・一時金）	500,000円

NPO法人 神道国際学会　〒158-0096　東京都世田谷区玉川台2-1-15　ベスト用賀2F
Tel. 03-6805-7729　Fax. 03-6805-7769　info@shinto.org